

あとがき

以上、四〇二部隊より工兵隊に入り、終戦。二十年十二月十四日、奉天出発。抑留生活。二十三年八月、ナホトカに至るまでの幾多の思い出の中から概略を記したものです。

赤い夕日の沈むソ満国境、厳寒と白夜のシベリアの果てに、幾方の友が病に倒れ、飢えに苦しみ、戦いに散った数々の顔を思い出します。黙して、み霊のご冥福を祈り、ペンをおきます。

ソ連抑留回想記

和歌山県 藤本 藤雄

私は満州第二一四部隊、第一中攻城重砲二四センチ榴弾砲所属で、駐屯地はハルピン近くの阿城だった。昭和二十年になって戦争もますます拡大し、支那や南方に転属して行く人々も多く、私たちの中隊も二百人くらいいたのが八十人くらいになり、恐らく関東軍百万といわ

れたが、すでに三十万くらいになっていたのではないかと思われた。

いよいよ我々も大移動があるといわれ、各人身辺の整理や資材整備をして、三月ころだったと思うが、部隊全員満州国間島省延吉の近くの八道河の海拔三百メートルくらいの山頂に重砲陣地建設のため、夜を日について岩を切り、穴を掘って、全員火の玉となって大きなトーチカの中に重砲を備砲し、各一門につき百五十発運搬して、戦闘準備を完了した。

外の部隊に応援に行っている戦友を迎えに行くようにとの命令で、私達五人がトラックで暉春に向かったが、途中、国境から引き揚げて来る在留邦人たちは、リュックサックを背負い、杖をついて来る集団はひきも切らず、山の中腹で今晚宿営するのか、飯盒炊事している人々、恐らく野宿するのだろう。また赤十字のトラックに患者や看護婦さんが、疲れはてた女の方々たちも髪を乱し、運転台の屋根まで寝ている。そのような人々を満載して走るトラックの群れが続く。

友を迎えて帰途についたが、途中の部隊の幕舎に、地

方の婦人たちが川で米を洗っている姿を見て、何と変わったなあと驚いた。いよいよ部隊に帰り、ソ連軍を迎え打つのだと、胸にムラムラと勇氣が沸いてくるのを覚えてた。

昭和二十年八月二十日過ぎごろだったと思うが、間島省延吉にて、武装解除後、入院者、各方面に出発する部隊、私たちの部隊はソ連へ向けての二百キロ行軍に入った。天幕、外套、食糧、私物一人二十キロを担いでの行軍で、彈春を通ったが、ソ連軍の爆撃で真つ二つに折れ、川に落ちていた鉄橋、日本軍の迎撃を受けてかく坐したソ連戦車の数々、日本軍の箱爆雷、野砲、山砲の弾丸がたくさん残されておった。

ここでは相当な戦争があったのだなあと考えた。彈春を過ぎてソ連領に入った。小高い岡の広い地に戦車のキャタピラの跡が物凄く、恐らく何百台の戦車の集結地であったのだろうと思われた。行軍も、足が疲れ、こちらで少し休ませてほしいとみなが言ったが、雨も降ってくるし、もう少し辛抱するように、先に学校があるの

で歩いたが、何のことはない、学校なんか無い。山の中へ入って寝ろというのだから、山の斜面で木の下に合羽を敷いて、毛布を敷き、外套と雨合羽を合わせてかむって寝たが、朝になって起きてみれば、何もかもずぶぬれだ。毛布や外套を頭の上へ広げて乾かしながらの行軍だった。

荷は濡れて重くなっているし、持ち物を一つ一つ捨て、手軽にして歩く人、また落伍してその場に坐り込んでしまふ人々、大変だったが、四日ほど歩いてソウガワニという所でしようか、港に船の付いているのが見えるところの小高い岡で、天幕を張って宿営して、二日ほどおったと思う。

そこでもソ連軍の兵隊が時計を取りに来たりしたが、木の枝で地べたをたたいて大声で追い返したり、ソ連軍の将校に大声で助けを求めたりした。

それから町に行つて、駅で貨車に乗つて、一日乗つて次の駅に着いて、下車して、飯盒でスープをつくり、朝食を済まして、車座になって火にあたっていると、ソ連兵が五人ほど来て、時計がほしいといつて、九州の安河

内上等兵との間で黒パン三個（十五キロ）と交換した。

ところが、ソ連の兵士も、配給のパンと交換しては困るので、取り返しに来た。安河内さんが黒パン三個を天幕に包んで、その上に腰掛けて火にあたっていたのだが、ソ連兵の一人が安河内さんにナークリーヒ（煙草をやるう）と言って出した、それを取りに腰を上げた途端、別の兵士が天幕に包んだパンを取って逃げようとしたので、ソ連兵をつかまえて、袋だたきにして取り返し
た。

ソ連兵が銃でうつまねをして、大乱闘をした。ソ連軍の上官が来て、みな車へ帰って、自分の持ち物を前に置いて坐っているようにとの指示で、みな持ち物を前に置いて坐っていると、ソ連兵が来て、目ぼしい物を手当たり次第に取り上げて引き揚げた。目ぼしい物を取り上げれば騒動も起こらないだろうとのことだと思ふ。

それより一日汽車に乗って、夜中に山の中にとまっていた。そこで下車、丁度十月に入っていて、零下二十度くらい
の寒さで、地べたは凍結して、すべりこけるありさままで、革靴は凍って、靴の中で指を動かさし、足踏みをし

ていなければ辛抱できない。ここはカナダという所で、囚人の収容所だった。赤い屋根のブラックの建物が並んで、背の高い、鼻の高いソ連兵が木の枝に、缶の中に布を入れ重油をいれて火を燃やしている、たいまつを持って笑っているのを見て、ゾウツとしたものだ。

囚人の列が出て行った。いよいよ門が開かれ、建物の中に入ったが、ペーチカの火を見ると、キューと暖かく感じたので、ああ、生きられたと思つたが、疲れと眠いのとで、荷物を置いたまま横になり、寝てしまった。朝起きて見ると、体も足も手も凍ったように冷たく動かなくなつてしまっていたが、体操をして体をほぐして、何とか動けるようになり、朝食は三百グラムのパンとスープを飲んで済ませたが、腹がへっていたので、とてもおいしく食べた。

ここはカナダの第八収容所（カローナー）だった。一班、二班と分かれて大体二十人くらいであったように思う。伐採、鉄道工事などだった。私たちの班の監督はとても好い人で、仕事もそうきつくなかったのに、帰って見ると、各班のノルマの成績が出ていて、私たちの班の

成績が一五〇%で、食堂では五百グラムの大きなパンが支給されるし、何といいなあと思つた。

外の班は六〇%、五〇%なのに、翌日も一生懸命働いて帰つたが、一七〇%と一番最高だつた。その後、作業がかわつて、鉄道作業で、一輪車で山の土を鉄道線路の補強に運搬する。班長はじめいつも最高の成績なのに、他の班に笑われないように働こうと言い合つて、一生懸命に働いた。帰つて見ると七〇%となつている。明日はもっとしっかりやろうと一段と馬力をかけてやったが、四〇%だつた。パンも二百グラムだつた。それから二、三日仕事をやったが、相変わらずだつたので、ロシアでは働かないのがよさそうだ。明日はストライキだ。翌日、木の根を集めて火をたいて車座になつて坐つて火にあつたっていたが、監督が来て大きな声で怒るが、何を言ふか、働いてもノルマが上がらないからだと言つて働かない。ソ連兵（カンボーイ）はハハハと笑つて、ハラシヨ、ハラシヨ、アデハイ、アデハイと笑つている。

午後五時になると、もう五時だ、カエル、アツマレ」と言つて線路に集めた。みな走つて並ぶと、監督は

カンボーイにつかみかからんばかりにし、奴ら今日は朝から仕事をしていないのに、帰すとは何事かと言うと、カンボーイは何を言うか、仕事をさせるのはお前の責任だ、俺は一日事故のないようにして、五時になつたら連れて帰るのが役目だ。何か文句あるかといつて、鉄砲に銃剣をつけて追ひ払ひ、ハハハハと笑つて、マエーツーメー（前へ進め）と言つて帰つて来た。その後、ロシア側もカンボーイを現役の若い兵隊に変えて、ブストリ、ブストリを連発し、仕事がおそいといつては突き倒しに来るようになり、悪くなった。

私も栄養失調になつてカトウの病院に入院したが、この大変な所でロシア人がやっているときはよかつたのだが、日本人にまかせるようになって悪くなり、「今日は食事が少ないので手で受けてください」といふて、スプーンに二杯か三杯配る。みな文句を言うつと、「このロシアという所は働かざる者は食うべからずという困だ、俺は働くのだからたくさん食べるのだ」と言つて、文句を言う者はなぐられて大変で、病気が治るところか大勢死んだ。

悔しかったら退院することだ、退院したら飯盒に二杯やるわと言うので、みなむりやり退院すると、何とおかゆは飯盒に一杯、スープも大豆が飯盒に一杯、六食分ある。退院してガツガツ食べると下痢をおこす者、大変な目に遭った。

夜、便所に行こうと思って、タラップの上を歩いて行くと、何かいると思つて見ると、死体が五、六体、板扉にもたれていたが、別に恐ろしいとも思わず、便所より戻つて寝た。終戦後、晩に祈るといふ事件が報道されたが、日本人が日本人を殺したことは数限りなくあつたのではないだろうか。

概して関東軍の現役の若い人のいるカローナー（収容所）はすべて殺人カローナーといわれた。カトウの病院を退院して、ジグザグシンの第十六カローナーへ来たが、ここには千島の部隊の人々で、主に三十歳以上の召集兵の方々で、とても親切でよい人が多く、一番長く過ごし、一番居心地のよいカローナーだった。

日本の医師は、田辺市出身の真砂先生で、とてもよい方でした。ソ連では月に一回カミツシャ（医師団五、六

名）が来て身体検査をして、尻の肉づきを見て一級、二級、三級、オPPER、スラーペーオッペと五段階に分け、一級、二級は重労働、三級は営内当番、オッペは一日三時間労働、スラーペーオッペは寝ては食いで栄養食を食べて毎日休みだ。

カミツシャの巡視のときは、傷をしているのに治療していなかったりしたら、チョルマに入れられるといつて、医師もピリピリふるえるくらいに、みな悪いところがあれば言ってくれといつて大騒ぎする。あの汽車もないシベリアのすみずみまで、暴力は使わせない心遣いが行きとどいているのには頭が下がった。

スターリンの偉大な力を感じた。ソ連兵は暴力は絶対に禁止で、日本軍の支那捕虜の扱いを見ている私には信じられないことだが、日本人も暴力を振るうではないかという、あれは外国人だ。ソ連の法律を知らないのだ、しかしソ連人はソ連の法律を守らなければいけないのだというようなことを言っておった。

私はオッペになり、一日三時間労働だが、働かないので一日中追い回されて働くのだが、営内の監督（ポンプ

ベイト)と鬼ごっこをしているようなものだった。ある日、私は栄養失調で入室しておったが、ロシアの医者が変わって、女医さんが来られた。この方はトニーヤーという人で、病室に来た患者一人一人見て回られて、私に名前はと言われたので、フジモトと答えると、大変やせているね、少し運動をしなければ駄目です。明日から室内の掃除をやりなさいと言われた。

翌日ふき掃除もやりなさいといひて、朝おはようと言って入ってきて、フジモト、足も少ししっかりしてきたね」と言い、今日は私の室へ行きましょう、少し手伝ってくださいといひるので、それから毎日行くと、食事をつくって食べさせてくれるし、ご主人もとてもよい人で、ソ連の大隊本部の軍医だった。帰るときは大隊本部のソ連の衛生兵に送ってもらって、収容所に帰った。

この女医さんは白人で、目の玉は真水色で、私と同じ年の二十七歳で、とてもきれいな方だった。ロシアの捕虜生活で一番お世話になった人の中の一人だった。今日は収容所にきれいな花が咲いているので、少し持って来てくださるとマダムに言われて、花たばを持って駅を

通ったが、大きな貨車の戸にバッテンに太い角材を打ちつけ、木のトユをつけた貨車を見上げると、窓から白人のきれいな娘さんたちが耳飾り、首飾りをつけて、笑いながら、ヤポンスキーザルザート、チベトクダイ(日本の兵隊さん、花をください)と言っている。私は少し渡すと、スパシーバーといひて喜んでいた。この娘さんはハンガリー、ユーゴスラビア、ブルガリアなどのソ連の占領地の貴族の娘さんだということだった。

この収容所に被服、食料の係をしているソ連の軍人の奥さんがドイツ人で体格のよいきれいな方で、いつも寒いときなど、オーイ、オーイと呼んでくれるので、入って行くと、今日は寒いね、ここで手をあたためなさいと言ひて、コーヒーを出してくれた。私がマダム・ゲルマンダと言ひると、ネルジャール(そんなことを言ひてはいけません)と言ひた。同じ捕虜の身で私達を哀れんのでこのことと思う。

そのうちにこのマダムがいなくなった。聞けば、ロシアでは捕虜は年に一度集められるのだそうで、夫の軍人はほおひげ、口ひげをはやして、失意の人のようになっ

ていたのも、マダムがいなくなつて落たんしてのことだと思つた。

ある日、マダムドクトルが私に、今度隣のカトウの第二收容所が療養所になつて、この沿線の收容所のオッペがみな集められることになつたといふので、私も一緒かと言つと、もちろん貴方も行くことになるでしようと言つたので、私はここではマダムのようなよい人のお蔭で食事もたくさんいただいて幸福だが、向こうに行けば知る人もなく、体も元に復することはないだろうと言つと、そうか、藤本はこちらにおりたいか、それではナチャニック（收容所長）に相談して行かないようにしてあげようと言つてくれた。

その夜おそく汽車が着いたので、オッペは全員すぐ行くように言つて来たので、しようがなく駅へ行つて無蓋車に乗せられてカトウに着いたが、雪が深く、腰まである雪の中を歩いて第二收容所に行つて、その夜は寝た。

翌朝、日本側の部隊長の島森大尉殿、この方の同期生の方は小尉、中尉といふ方ばかりだと聞いたが、この方は陸士卒業後病気で退役された方だと聞いた。容貌とい

い、大変人格のある方だった。この時期から共產主義運動が始まり、我らの部屋といつて特別な学習部屋で、常勤の専門家がいて、企画、運動を展開する卵であつた。

朝礼後、我らの部屋の指導員の方が、皆さん、今晚我が部屋で偉い人のお話がありますので、お集まりくださいと言へば、島森大尉さんは、今晚食堂で歌舞伎の話をお願いしますので、お集まりくださいと言ひ、みな食堂に集まつてしまつた。

その後、島森大尉の巡視があつて、私に、なんとやせているなあ、食事が足りないのだろう、炊事当番をやんなさいと言つてくれた。炊事の事はきつく、夜は三時間くらいしか寝られず、食事を済ませば、そのまま掃除にかかると。床板を洗つてノージックして、真っ白にし、かまどを石灰を塗つてきれいにする。その後材料の受領をして、昼食をつくるので、全身の水が足に集まつてボンボンに腫れ、顔も大きくムクんでしまつて、坂本軍医さんが、藤本、入院しなきゃならんなあと言われたが、一年前の入院のえらい目に遭つたことを思うと、軍医さん、入院はご免です。死んでもかまわない、炊事で食ひ

死しなすと言って断り、黒パンを食用油につけて食べる
とおいしくて、身につくよう、食用油を飯盒に一杯く
らいそのまま飲んだが、毎日、十五日くらい飲み続けた
が、顔もどこも油がズルズルに吹き出してくるようにな
ると、油を見るのも嫌になったが、これで体も元に復し
た。

ある日、夜間作業が終わってバーニヤで風呂に入っ
ていたが、ポンブトリドオ（作業監督）が来て、何と立派
な身体だ、炊事に置いておくのはもったいないといって
作業にされてしまったが、長い間、家内労働だったので
で、外に出れば雪焼けて顔がパチパチと焼け、昼までに
顔が真っ黒になって、顔が皮がはげて熱が出て、昼から
休んで寝たが、夕方になって大分よくなったので、医務
室にアスピリンをもらいに行ったが、熱を計れといって
計ったが、三十八度。明日休めといわれた。

翌日、坂本軍医さんが、藤本入室だ、手足を洗って入
れと言われた。二、三日して隣のジグダッシュの第十六
収容所に大工事が始まったので、この収容所からも百人
送ることになったらしく、仕事に行っている人以外の人

を集めて行くことになり、私も申し込んで、その日の中
にジグダッシュに昼過ぎに着いた。前におった収容所な
ので、知っている人が多く、みな喜んで迎えてくれ、前
に君が行ってしまったって、マダムドクトルが大変怒って来
て困ったのだけ、藤本君はマダムに好かれているのだな
あとひやかされた。

マダムドクトルはまだここにおられるのですかと
と、フジモト、フジモトと言って来て、大変喜んでくれ
て、ある日、深さ二メートル、幅一・五メートルの水道
工事の溝の底に入って土をスコップで投げ上げている
と、泥水に人の影がうつったので、上を見るとドクトル
が下を見ているので、ズラスチー（今日は）と頭を下げ
ると、笑って見えた。危害防止のため、収容所長以下
五、六人、オエラさんの巡視だった。その日帰ったところ、
医務室より呼ばれて参ると、マダムが藤本！ラポー
ト、ムノーガーハラシヨールと言うので、笑っていると、
上を向いて考えていたが、泥水が多くて悪いなあ、明日
患者にしてから明日休みなさいと言ってくれた。

それからまた前のようにマダムの所へ行くようになって

だが、工事も最高潮になり、一人でも多い人員が必要なことから、藤本君、少し手伝ってほしいと言って来たので、食堂二十坪ほどで百人が一度に食べられて、食堂の三人の人が掃除していたのを私一人でやりますと引き受けた。今までは棒ぞうきんでの掃除はちょうどゴミをなすりつけるようなもので真っ黒なので、これを水をたくさん使って洗って、一部ノースリック（ナイフで板の表面をけずる）をして十日ほどで食堂を真っ白に磨き上げ、入り口に大きな桶に水を植えて、机の上に缶詰の缶に花を差して飾って、収容所でみなに喜ばれ、収容所長にも褒められた。それには時間がかかり、食堂に寝て朝三時ころ寒くて起きると、少し明るくなっているのです、すぐ水を汲んできて朝食までに済ますのだから、大変だった。

朝食を済まして、食事の後の掃き掃除をして、マダムのところに行つて用を済ませ、医務室の掃除をし、衛生兵の代用もやった。

ある日、マダムドクトルが、藤本！今日は私の家の野菜の配給をサルワッカのバザーへ行つて受領してきてく

れないかと頼まれて、少しカラピシして少し余計にもらつてこいと言うので、そんなことしてもよいのかと言うと、少しくらいはかまわないよと笑つて言つたので、汽車に乗つてサルワッカに行つた。

バザーの前に係員が計器を置いて、倉庫の中から出して来るのを待つており、一袋持つて行つて計つて帰ればこれで終わりなので、少し倉庫の中で待つていると、近くの収容所の日本の兵隊さん二十人ほどが野菜受領に来たので、その人々にまじつて野菜を出して行つて、前の人が計つているうちに、すぐ近くに川があり、その中へ足でけ落とし、またかつき出してくるようにして、四袋カラピシし、最後の二袋を計量して帰るようになった。

ソ連の係員がそのまま帰つていたので、川の野菜を拾い上げて駅へ運び、貨物列車が着いたので運転手に野菜一袋あげるからジグダッシュまで乗せてくれと言うと、よし乗せてやろうと言つて、乗つてジグダッシュに着いて持つて帰つたが、マダムは大変喜んで、野菜一袋と肉と食用油とをもらつて来て、医務室で天ぷらを作らへて、真砂先生ともう一人の若い医師もおられた。

名前は忘れたが、患者にも配って食べた。

みなのおえらいねたみを受けて、収容所の至るところに貴族藤本ぶっ倒せという張り紙をはられた。昭和二十三年一月一日につるし上げをされることになった。

いよいよ一月一日、地区の啓蒙宣伝部長の草山という人も来、総員五百人の大人民裁判だ。みなが口々に非難をぶっつけてくるが、その中で東北の人であったと思うが、斉藤という人がことごとくに食ってかかる。私が衛生兵の代用をしているときに、みなが診察に来て休みにくるので、みなに体温計を渡して熱を計るのだが、熱が上がりたといっっては摩擦したり口で吹いて上げたりするが、ほとんどが熱があるということで休むようにしていたのだが、この人は腹が痛むということで、医師より絶食を命ぜられていたのだが、腹が減って寝るのも可愛そうだと思って食事を上げてきて、置いておけばペロリと食べている。

このようによくしているのに、何を言うかとばかり、共産主義とは正しい者が非難され、悪い者が非難されない主義のことかと言うと、そんな悪い奴とはだれかと言

うので、この斉藤さんだ、この人はこんな人だ、私は働いて個人が納得でもらった物ばかりで、人をだましたり人の上前をはねたりしていないのに、何を言うか、こんな主義だったら殺されたって絶対に共産主義には入らないと言うと、絶食と言われているのに食事を与えた君も悪いのではないかと言われて、そのまま人民裁判は終わったが、翌日、共産党員の人が、共産主義とは君の思っているような運動ではないので、これから協力してくれと言ってきたので、それより医務室では厳しくして、共産党員に対しては特に厳しくしたので、みな困ったと言っていた。

この時にはマダムドクトルもご主人の転動のためよそに行かれておられなかったが、ご主人、マダム、お爺さんが煙草を持って、藤本は煙草がなくて困っているだろうと持って持ってきたのだよと持ってきてくれた。この方々のご恩はありがたく一生忘れることはできない。

私も少し共産主義の勉強をして、みなと一緒にやらなければ帰れないと思ひ、二十七歳なら青年同盟へ入れと言われ、勉強会にて弁証法的唯物論とは何ですかと質問

すると、今ごろこんなことを言う人がいると大笑いされたので、弁証法的唯物論とはそんなによいものか、勉強してみようとソ連共産党小史を読んだが、辞書もないし、二年も書物を読んだこともないし、頭も石のように固く、頭はすぐ熱くなるし、しようがないので、弁証法的唯物論をわからずに反復して読んで、夜は消灯後ランプの火を小さくして二時間、朝四時に起きて起床六時まで、二時間毎日読み、四日ほどで百八十回読んだ。そのお蔭で先生が質問を出すのが、私は一番新米だから控えていると、みな答えが間違っているので、最後私が手を上げて答えると、そのとおりのう。皆に笑われたが、皆勉強しているといっても本当に勉強していないのだなあと思うし、何か胸に当たるものがある、それからは一生懸命に勉強もし、運動にも参加した。

私の班に九州出身の田中さんという共産党員の方が指導者で来ておられたが、この方は頭がよいのか、教え方が鮮やかで、難しい言葉を使わず、手に取るようにというか、わかりやすく教えてくれたので進歩した。教育の初めは、人間が生きるためには衣食住がなければ生きられ

ない。衣食住どれも働かないでできたものはない。だから生かすためには働かなければならない義務がある。怠けもののおれば、ほかの者がその人の分を働かなければならず、そのような怠け者を一人も許してはならないということ、仕事をしていて少し休むと、ほかの人に何をしているかと言われるので、お互いに休めないのことは困ったことになってきたと思ったが、みなが一生懸命に働く意気が満ちてきていると見えたのか、共産党の方から、働くのも大切なことだが休むということも大切な労働である。午前、午後十五分ずつ中休時間をみなの意見で定められ、その後みな労働の意気がますます盛んになって、今度はみな働いていても、今日はどうも調子が悪いときがあるし、そんなときはみなに言って自由に休んでよいというようになって、何と共産主義とはよいものだなあと思うようになった。

私の班でも指導者の田中さんが、夜間作業が終わって帰っても、六時に起床、朝の行事をして、今日の仕事の計画を聞いた朝会だが、田中さんが起きて来ないので、北海道の方が、佐藤さんという方は絵師だとのことだっ

たが、田中さんは指導者だのにたるんでるのでつるし上げにしようと思ひに話したそうだが、田中さんを信頼している人が多くて、何を言うか、反対に佐藤をつるし上げようという気運が盛り上がってきた。

田中さんが私を呼び出して、佐藤つるし上げに協力してくれ、進捗係をやってくれと言われたので引き受けた。そして佐藤さんにそのことを話し、私が佐藤さんに、何で我々指導者の田中さんをつるし上げるなんてというところでもないことを言ったのかと質問すると、田中さんは朝の行事にも出ないから言ったと言いなさいと行って、つるし上げも途中で終わって、田中さんも反省されて事なきを得た。

このように、悪いことを反省してやれば、みながますますその人に親しみを持つようになり、私たちの部隊が日本に帰る船内でも、何の争いもなく、仲よく帰ることができた。この収容所は共産主義運動もとても盛んなところだったが、あるときソ連の共産党政治局員の人が来られて、みないろいろ質問したが、このとき、日本とソ連との間に中立条約を結んでいたのに、なぜソ連が日本

をせめて来たのかということだった。そのときは、今私はそれに答えることはできない、少しお待ちくださいということだった。その後答えに来たが、それは、あの段階では日本はソ連が参戦しなくても敗れる、そのままにしているとアメリカが満州も占領して、ソ満国境にアメリカが来る。これは困る。そして満州、朝鮮も解放して戦争を終わらせることだと言った。

私も一応ここで何とかしなければと思い、医務室に行つて、医師に身体も少し悪いので入院させてくださいと頼んだところ、診断して入院しなさいと行って、カサブランカの病院に入院し、ここで共産主義の勉強をしなから入院生活を送っていました。この病院に九州帝大の教授であられたという太田先生がおられた。この方は男前がよいし、とても親切で静かな方だった。共産主義もここも盛んで、患者が先生をつるし上げるといふ状態です。先生も患者と同じところに寝ることになっていた。

胃がいれんをときどき起こす小林さんという人が夜中に胃がいれんを起こしたとき、太田先生が一番早く気づかれて治療され、事なきを得たと聞いた。

あるとき、またつるし上げが行われ、先生方がみなに文句を言われているので、私はこれはちっと違っていないか、先日、小林さんの胃けいれんの時も、太田先生は一番先に見つけて治療してくださいました。先生方はみな私たちのために誠心誠意尽くしてくれているのではないのでしょうか、先生方も文句を言われるというのは、表現のしかたが悪いところがあるのではないのでしょうか。ご注意くださいと言ったところ、納得してくれて終わりました。

太田先生は大変喜んでくれて、食事の配分係をやってくださいと頼まれた。ロシア側へ言って置くからということ。その当時、前に憲兵をやっていた人とか、共産党の運動に消極的な人とか、元将校とかで、反動と云ってはねのけになっている人が七人おって、いつも大声で怒鳴られて、いつもキツイ仕事ばかり押し付けられている。反動の人々を太田先生は哀れんでおられたので、反動の人にもよろしくと頼まれたので、私は食事を分配して、少し残して、反動の人々にバックンを洗うように言って、残りの食事を食するようにしたが、みなが何か悪い

ことをしているのではないかと探り出そうとするし、これはうかうかしたらまたつるし上げされるのではないかと覚悟をしたが、ちょうど日本に帰る人名の発表があった、私の名も入っていたので、やれやれ助かったと思っ

た。
反動の人も太田先生も喜んでくれて、三日してナホトカ港に向かって汽車に乗り、ナホトカにて日本の明優丸に乗って舞鶴に向かった。昭和二十三年六月末だった。

ソ連での生活

和歌山県 楠山 良治

ご詠歌に人生わずか五十年と歌われている。終戦になって四十四年余の星霜が走馬灯のごとく過ぎた。今右の耳から入り、左の耳に抜ける物忘れが多くなった。半世紀前の思い出の記録を集めて、書いて見た。

昭和十一年、徴兵検査で丙種合格国民兵であった。戦火はますます熾烈になり、戦績は前線で思うようにはか